

■ 研究論文

# 中山間地域の共同体が持つ教育力の検証

## An Inspection of the Community Educational Function in the Intermediate and Mountainous Area

蜂屋 大八<sup>※</sup>  
*Daihachi HACHIYA*

**要旨：**中山間地域の現実的課題を克服し、創造へと結びつけるための努力を自らに引き受けて活動する人物達（キー・パースン）は、どのような形成の過程を経てそのような行動特性を有するに至ったのか。本稿では、鶴見和子の内発的発展論のうち、特に人間の自己創出の視点を持ち得て以降の考え方を軸に、山形県最上郡金山町の集落における自治活動の分析および考察を行った。

**キーワード：**鶴見和子、内発的発展、自己創出、自治活動、地域共同体

### 【目次】

#### はじめに

#### 1 章 内発的発展論の系譜

- 1 節 内発的発展論の地域開発の視点
- 2 節 「自己創出」の視点で捉えた内発的発展論

#### 2 章 地域における人材養成の仕組み

- 1 節 集落の住民活動に内包される地域人材養成の仕組み
- 2 節 社会関係資本の形成・コモンズの視点から

#### 3 章 キー・パースンの形成と地域

- 1 節 内発的発展論における自己の創出
- 2 節 「萃点」から見たキー・パースンの形成

#### おわりに

### はじめに

現在、多くの中山間地域で活力の低下が問題視され、「地域コミュニティ活動を行う各種団体、地域住民そのものに力を与え（エンパワーし）、その自発性を一層引き出すには、具体的にはどうすればよいのか」[1]という点が課題となっている。その一方で、東北の農山漁村地域にお

ける住民相互の支え合いの機能が東日本大震災でにわかに注目を集めたように、中山間地域では、いまだ住民自治が機能し、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴[2]とされる社会関係資本の形成が見られる。このような中山間地域において、地域の資源を活かした活動が数多く行われていることは、集落レベルでの人的交流や住民間の深い関係性の構築との関係性が強いと考えられる。社会学者の鶴見和子は、生涯をかけて取り組んだ内発的発展論の構築において、その対象を「土と水にもとづいて生活を営む場所」とし、その小さな地域において、地域の小伝統の中に、現在人類が直面している困難な問題を解くかぎを発見し、古いものを新しい環境に照らし合せてつくりかえ、そうすることによって、多様な発展の経路をきり拓くため、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身に引き受ける人間をキー・パースンと位置づけた[3]。人間は、誰しものが必ず、自らが居住する地域との関係性を有しながら存在している。しかし、条件的に不利な中山間地域に身を置き、創造的苦痛を我が身に引き受けながらもその地域の発展を模索する人物は、どのようにして高い地域志向性、共同体を重視する行動理念などを獲得するに至ったのだろうか。地域がそのような人材を求め、キー・パースンたる人物がそれに呼応すべく形成されたと考えることはできないだろうか。本稿では、地域共同体が本来的に有してきた人材育成の機能に着目し、あまりにも自明のことであるがゆえに着目されてこなかった「地域の教育力」を検証していきたい。その際、鶴見の内発的発展論を軸

※ 宇都宮大学基盤教育センター 特任准教授

に、中山間地域である山形県最上郡金山町の地域コミュニティにおける住民活動を事例として取り上げ、その考察を通して、キー・パースンの主体形成に「地域の教育力」が関係していることを明らかにする。

## 1章 内発的発展論の系譜

### 1節 内発的発展論の地域開発の視点

鶴見は、プリンストン大学でマリオン・リーヴィ教授の指導の下、社会学の立場から近代化論を学んで帰国した。近代化における発展の内発性、外発性について最初に触れたのは、タルコット・パーソンズである。最初に近代化したのは、産業革命を起こしたイギリスであり、それに続いて近代化した西欧諸国を内発的発展した国とし、その技術を自国の産業発展に採り入れて近代化したアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸国は、先発の内発的発展諸国の事例を手本として、後発的に発展を遂げたという意味で、外発的とした。このように発展における内発と外発の理論は、国家を対象として捉えていた。これに対し、鶴見の内発的発展の対象は、生活者たちの暮らす小さい地域である。鶴見は、1975年に出した「柳田国男の仕事モデルにして内発的発展を考える」という論文で、初めて「内発的発展」という言葉を使った。同じ年にスウェーデンのダグ・ハマーショルド財団が国連第7回特別総会に、「もう一つの発展」という報告書を出している。奇しくも同じ年に出された二つの文章が示したものは、先に近代化した国のモデルを採り入れる形の発展ではなく、小さな地域がそれぞれの生態系、社会状況、文化的伝統に基づいて、地域独自の道筋での発展を遂げる道筋であり、先発・後発の二項対立ではない「多系的発展」を目指すものであった。このため、それまでの国家レベルでの近代化論ではなく、もっと小さな、自然生態系や文化的伝統を一にする地域を対象と捉えるものとなったのである。

鶴見は、内発的発展論を考える際に、経済学者の玉野井芳郎の「地域主義」の定義を採り入れている。それによれば、「「地域主義」とは、一定地域の住民が、その地域の風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して一体感を持ち、地域の行政的・経済的自立性と文化的独立性とを追求することをいう」[4]とされる。ここでいう「経済的自立」に着目して、主に経済学的な地域開発の視点で主張されたいくつかの内発的発展論がある。

清成忠男は、企業誘致などの他力本願的な開発は地域の主体性を失わせることを問題視し、地域が、地域に存在する資源、労働力、伝統的技術等々、要するに地域に内在するポテンシャルを最大限に活用して主体的に工業化をおし進めることによって、地域が自分の足で立つ内発的地域開発を唱えている。内発的な地域開発は、「外から」の企業誘致ではなく、「内で」の創造的発展であり、地域のポテンシャルを最大限に活かした地域開発には「創造」のプロセスが必要である。このプロセスにおいて、地域的特性に応じて様々な組み合わせが行われるため、地域的個性が色濃く打ち出される。それまでの地域開発が画一的で地域の解体を促進したのに対し、内発的地域開発は、地域的結合性を強め、地域的独自性を強調することになると指摘している [5]。

これに対し、宮本憲一は、地方自治体の手で行い住民福祉を向上させていくような地域開発を「内発的発展」と呼んだ。それは、外来の資本や技術を全く拒否するものではなく、地域の企業・労組・協同組合などの組織・個人・自治体を主体とし、その自主的な決定と努力の上であれば、先進地域の資本や技術を補完的に導入することを拒否しないという考え方であった。1970年代に見られた数々のまちづくりの事例は、高度経済成長期の外来型開発に取り残された地域の中でのオルタナティブな方式として始まったが、その成功例に倣った「ふるさと創生」や「一村一品運動」等は、補助金をもらうために行う政府や県主導の動きであり、その地域に住む人々が主体的に行う内発的発展にはならない点を問題視した [6]。宮本は内発的発展の原則として、第一に、地域開発が大企業や政府の事業ではなく、地元の技術・産業・文化を土台にして、地域内の市場を主な対象として地域の住民が学修し計画し経営するものであること。第二に、環境保全の枠の中で開発を考え、自然の保全や美しい街並みをつくるというアメニティを中心の目的とし、福祉や文化が向上するよう総合され、なによりも地元住民の人権の確立を求める総合目的を持っていること。第三に、産業開発を特定業種に限定せず複雑な産業部門にわたるようにして、付加価値があらゆる段階で地元で帰属するような地域産業連関を図ること。第四に、住民参加の制度を作り、自治体が住民の意思を体して、その計画にのるように資本や土地利用を規制しうる自治権をもつことを挙げている [7]。このように、宮本の内発的発展論は、環境経済学の立場から、地球環境問題を枠組みとして持続可能な社会を目指す観点に立ち、地域政策として示された内発的発展論であった。

保母武彦は、「地域主義」に閉じこもるのではなく、都

市との連携・活用を図り、地域の自律的意志により国家の支援措置の活用を図る考え方である。保母は、内発的発展が芽生える契機として、一つに郷土の自然や生活文化・郷土愛、もう一つに人間の持つ創造の欲求・労働の欲求という二つの要素を挙げ、このような人間性の原点に発する内面的な要素が内発的発展に向けた行動へ結びつく理由は、外来型開発に地域の将来を託すことができないからだとした。それは、企業の外来型開発の行動要因が当該地域住民の思いと異なるため、その地域とそこに暮らす住民の生活を向上させない本来的な欠点を持つと指摘している [8]。そして、都市や国家に地域が振り回されず、主体的にそれらとの関係を築き、地域の「自律」を実現するためには、地域の自己決定権を発揮することが重要であり、そのためには地域のランドデザインをしっかりと描くことが必要とした。ランドデザインでは、地域の資源（ハード・ソフト）と潜在的・顕在的な地域の条件を活かして、住民の夢と現状を橋渡しするデザインが必要であり、そのことは「地域の独自性」や「地域の個性」とも関係する。この過程では、住民の誰もが参加して議論と決定ができる場が必要であり、それを担う組織として、自治公民館の活動が有効な役割を果たすと期待している [9]。保母の内発的発展論は、地域住民の人間の欲求の実現を内発的発展の出発点とし、地域の自律性を担保した上で、地域外の支援等を活用するとした点で、内発性発出の根拠と、外部からの支援を採り入れるために地域住民が行うべき前提が明確化されている。

このように、経済学的見地からの内発的発展論は、国内では、高度経済成長に取り残された地域において、当該地域の特性や地域資源を活かした地域開発の際の理論として解釈され、用いられる場面が多かったと言える。この点において、鶴見の内発的発展論は具体的な政策論として示されておらず、地域開発の理論としてそのまま用いることが難しかったのではないだろうか。しかし、一方で、宮本の論が示す、地元の技術・産業・文化を土台にして、地域の住民が学習し計画する場や、住民が意思を体するための住民参加の制度を作る場には、住民の主体的な学習が必要となるだろう。また、保母の論が示す郷土の自然や生活文化・郷土愛、人間の持つ創造の欲求を自律的な地域づくりに結びつけていくための自治公民館での活動にも住民の学習の要素が存在する。地域の開発とは言え、根源的にはそこに住む住民がその土地で生きていくことと結びつかなければならない。したがって、地域の内発的発展は、その地域住民のライフプランニングや人間形成の要素を抜きにして考えることはできないのである。経済学的な内発的発展論のアプローチに

は、このような住民の学習への言及が不足していると考えられる。また、社会教育研究においても、このような学習への着目がほとんどなされてこなかったのではないだろうか。このため、本稿では地域住民の学習の観点から、内発的発展論を捉えることを試みたい。

## 2 節 「自己創出」の視点で捉えた 内発的発展論

先発して近代化した国々に対して後発的に近代化する国々がいかにして発展の道筋をたどるかという、国家の枠組みでの近代化論に対し、鶴見の内発的発展論は、自然生態系や文化の伝統を同じくする小さな地域を対象とし、地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すための、多様性に富む社会変化の過程であるとしている [10]。鶴見の内発的発展論は、従前の近代化論が用いた、単一の近代化モデルの後進国への伝播という考え方とは異なり、国家よりも小さな地域の自律性に基づいて創出される発展の在り方があり、先発・後発を問わず、相互に、対等に、活発に手本交換が行われる「多系的発展」を目指すものである。鶴見が当初捉えていた内発的発展論は、コミュニティと重なる小さな地域を対象としているものの、あくまでも「近代化」に対抗する上でとるべき地域発展のための社会変動の理論であり、そこに住む人間の形成や自己創出という視点は重要視されていなかった。

鶴見は、その後、1996年に脳梗塞で倒れたが一命を取り留めた。半身不随となった鶴見は、それまでの内発的発展論をさらに高めるべく、石牟礼道子、中村佳子ら各界の識者達と対話を重ね、「鶴見和子対話まんだら」としてまとめている。鶴見は、生命の危機に瀕した際に、自分の身体の深淵から数々の和歌が吹き出すように出てきた経験を経て、「内発的発展が個体の生命というものと深く結びついていることがわかった」[11]と述べており、鶴見の内発的発展論自体も大きく転向する契機となっている。「対話まんだら」に描かれている内発的発展論は、人間個人の生命の自己創出という観点を得て、以前の内発的発展論から別の展開へと大きく変化したのである。さらに、「対話まんだら」で実現した、生命誌を研究する中村佳子との対談において「自己創出する生命」という概念と出会い、特に大きな進展がもたらされたように思われる。中村は、DNAの構造上、生物は基本的に同じであり、同じ祖先から生まれたにも関わらず、それぞれの生き物が独自のゲノムを基本情報として、アリはアリと

して生き、ヒトはヒトとして生きていることを、「生物たちの「内発的発展」(私の言葉を使うなら自己創出)であると表現した[12]。また、中村は、developmentの意味を「自らの内にもつものを望みの方向に伸ばしていくことです」[13]としているが、鶴見は、「自己創出する生命」というとき、「自己」がついている。内発的発展というとき、私が気づかなかったことがあそこにあるの。倒れてから、非常にそれがはっきりしてきたのよ」[14]と述べているように、一人の人間としての「自己」の創出という観点が、このとき鶴見の内発的発展論に採り入れられたのである。

中村との対談において、鶴見は、「それぞれの地域で、それぞれ違う形、それぞれ違う経路の発展があっている。だけど非常に大事なことは、近代化は経済発展、経済成長が指標で、それによって測る。ところが内発的発展は人間の成長が目標で、持って生まれた可能性を十全に発揮するような社会を目指す。そうすると経済成長は条件であって、指標じゃない。目的じゃないのよ。目的は人間がそれぞれ持って生まれたものを、思いきり発現することなの」[15]と述べている。経済発展は条件であって、指標・目的ではないとするところが、前節で取り上げた地域開発のための内発的発展論との大きな違いである。そしてさらに、自分の内発的発展論は、「どこの社会でも受け継がれた文化があるし、異なる生態系があるんだから、そこに根ざして、住民の創意工夫によって、もちろん外のお手本を参考にするけれど、主体は自己の文化と自己の生態系と自分たちの創意工夫によって、こういう形でやりたいというお手本をつくって、それで展開していく、そういう意味だったの。だから個体というものをあまり考えてなかった」。しかし、「自分が脳出血で倒れたあと、歌が吹き出したときに、「ああ、内発性というのは私自身のなかからでてくる」と気づいた。つまり個体のなかからでてくるものが、今度は地域という集合になるわけね。(中略)そういうふうに、地域からもう一つ段階をおろして、個というものの内発性に気づいた。だから今度は、目標は一人一人の可能性を実現することというふうにおいた」[16]と述べている。ここに、鶴見の内発的発展論が、地域に生きる住民の成長の理論として新たな視点を得たと見ることができよう。

歌人佐佐木幸綱との「対話まんだら」では、「内発的発展論という発想でも、倒れてから初めて、内発性ということが何か、だんだん身にしみてわかってきたように思う。抑えても抑えても私の個体から出てくるものが内発性なのね。その個体から出てくるものは遺伝子や何かの系統発生をして、私の個体から出てくる。それが内発性である。そういう意味では、私の個体の内発性と、私

の生まれ育った地域の内発性と、それから私の生まれ育った社会の内発性、それらがすべて系統発生と個体発生を繰り返している。そういうものが全部、内発性として蓄積されて、噴出してくる」[17]と述べている。免疫学者多田富雄との往復書簡では、「考えてみると「内発的発展論」というのは、倒れる前は理論として、理屈として考えていたと思います。しかし、今は本当に自分のなかにある内発性、それをどうやって展開させていくか、(中略)自分で内発的発展論を実感として体得している」とし、「内発的発展論の「内発性」ということの意味を、いま実感として、わたしの身の内に感じ取っている。そしてこれを、社会発展の理論として、それから人間の発展の理論として一人間の発展の理論であると同時に社会発展の理論である、そういう意味をもっているのが内発的発展論だと思わなければならない、これを死ぬまで、気を確かにもって、できるところまで展開していきたい」[18]と記している。

鶴見の内発的発展論は、国際的に注目され、国内でも数多く取り上げられてきたが、前節で述べたように、その多くは開発の遅れた地域に対する地域開発の実践の場面での適用であった。しかし、鶴見自身が体験的に明らかにしたように、本来その地域の内発性、社会の内発性を元に、そこに住む人々がその地域の中で自分をいかに満足させて生きていくかという、個人の内発性を根源とし、地域や共同体の中で、個体としての自分の発展をいかに位置づけていくかという意識変容のための理論であると考えることができよう。本稿では、鶴見の内発的発展論をこのように捉えて、以下の考察を行ってみたい。

## 2章 地域における人材養成の仕組み

### 1節 集落の住民活動に内包される地域人材養成の仕組み

山形県最上郡金山町は、県北部の秋田県境に位置し、2015年3月末現在6,071人の小規模な町であり、高齢化率(65歳以上の人口比率)は31.6%と、過疎化・高齢化が進行している。金山町の集落は、藩政時代の「金山郷十六カ村」とその枝郷の村に由来しており、元々、地区内の住民間の結束は固い。これを踏まえ、「金山町自律のまちづくり基本条例」は、「まちづくりは町民一人ひとりが自ら考え、行動することによる「自治」が基本です」とし、「町は、コミュニティの自主性及び自立性を尊

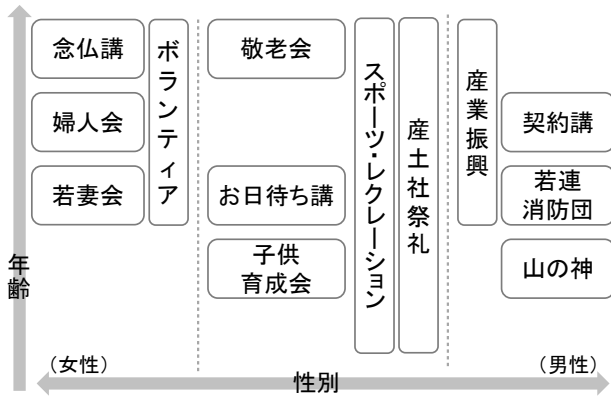
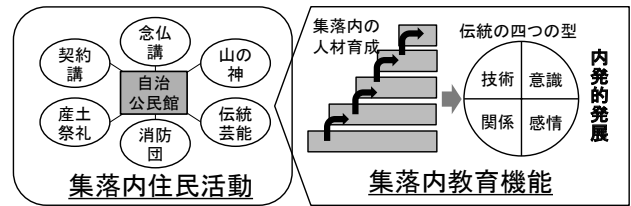


図1 金山町における「自治活動」の集落内構成図

重」としており、集落の基盤的機能を活かして住民一人一人の自治意識を啓発し、町はそれを支援するという枠組みを見ることができる。金山町の集落が基盤的機能を有し、自律的な自治が行われている背景には、日常的に行われてきた集落の「自治活動」による要因が大きい。自治会は行政の下請け的機能から行政の末端機構として理解されがちだが、金山町の住民が行っている活動は、行政による上からの押しつけではなく、住民が集落との関わりにおいて自発的に行っている活動である。本稿では、このような活動を「自治活動」と捉えていく。

金山町の各集落で行われている「自治活動」を年齢・性別ごとに分けると、図1のように示すことができる。これらの活動は本来、それぞれの目的でバラバラに行われているものだが、図2のように活動場所を自治公民館とすることで相互に結びつき、全体として多層的な集落内教育機能が形作られている。一つ一つの活動を通じて、集落内のしきたりの理解、住民間の関係性の構築、その



自治公民館を結節点として、集落を形成する活動、集落を運営する活動が日常的に行われている。

年齢・性別・立場が異なる活動を経て、集落に必要な資質を備えた人材が育成される

図2 金山町における「自治活動」と集落内での住民の学習

集落で生きていくための様々なスキルの修得、共働に対する認識や価値観の醸成が間接的に行われている。このため、住民が、個人の成長や家庭内での役割に応じて、所属する集団や参加する活動を移動することで、それぞれの活動を通じ、年齢・性別・集落内での役割に即して地域への結びつきなどの理解が進む。それらの結果、集落の運営に必要な人材としての感性や態度が養われ、区長や役員候補者のような集落に必要な人材としての資質が形成されているのである。このような実態は、金山町に限らず、自治公民館活動が盛んな他の中山間地域でも、同様の実態が見られる。長野県飯田市では、公民館の「分館活動」を通じて、互いを承認しあい、地域の誰もが「あの人」と信頼を寄せられる人格形成がなされた結果、地域の運営を担う人材が生み出されている [19]。宮崎県綾町でも、集落の中に網の目のように構築された講のネットワークが、互いに気遣い合う信頼性を生み、地域への理解と自らがそこに住む意識を形成している状況を見る

表1 伝統の継承の四つの型による分類

団体・活動	技術の型	意識構造の型	社会関係の型	感情・感覚・情動の型
契約講	茅葺き作業 火葬・土葬・野辺送り 公民館運営	相互扶助 共働 集落に生きる価値観	集落形成(集落規範) 結び・結び返し 家と家の関係性	しきたりの順守 共働の理解 集落の自治
山の神	勧進の作法 山の神まつりの実施	自然との関係性 山の神への信仰心	少年期における集落内での役割 コミュニケーション力	山の神を守る 同世代の団結
念仏講	念仏の唱え方 数珠回し 楽器奏法	相互扶助 集落に生きる価値観 仲間意識	集落内の不幸時における村念仏	婦人の交流・懇親 情報共有 息抜き場
若連・消防団	山車制作・囃子演奏 集落内の体制づくり 消防操法・器具使用	集落に生きる価値観 活力創出(力仕事) 地域おこし	集落における青年層の役割 リーダーシップ	伝統を守る 集落の安全を守る 同世代の団結
伝統芸能	演舞・演奏・所作 題目の継承 器具の保管・保存	集落に生きる価値観 集落の歴史 次世代への継承	集落の求心力 世代間交流 協調性	伝統を守る 活動を通じた楽しみ 目的の共有
産土祭礼	祭礼の実施 神輿・行列・のぼり 神事	産土神への信仰心 集落に生きる価値観	集落内の団結 土地と自分との関係	産土社を守る 集落を挙げての祭り 交流の楽しみ

ことができた [20]。

このような「自治活動」には、その地域に住み続けるための技術や伝統の継承機能を見ることができる。鶴見は内発的発展論で、地域を単位とする文化や伝統の中に、現代に活かしていけるものを見出す伝統の再創造の重要性を説いた。その際、伝統を世代から世代へわたって継承される「型」あるいは構造と定義し、家族、村落の構造などの「社会関係の型」、信仰、価値観などの「意識構造の型」、衣・食・住に必要なものを創る「技術の型」、音楽、舞踊、日常生活における行為などの「感情・感覚・情動の型」に分類した [21]。金山町の「自治活動」を、この四つの型を用いて構造化すると、表 1 のように、各活動において「型」に対応する学習が行われていることが分かる。金山町のような中山間地域では住民が入れ替わる流動性が少なく、農林業と関連する年中行事や、自然・気候との関係が密接であり、農作業も毎年の繰り返しが多い。このため、四つの「型」で継承される事柄が多く、「型」が機能する場面も多い。

図 1 と表 1 から、年齢層の幅を持ち、重なり合いながら、それぞれの「自治活動」が行われることによって、結果的に、集落内の意識構造や関係性の理解、価値観の共有、技能的スキルの獲得の点で、熟練者から若年者への教育が行われていることが明らかとなった。このような実態は、年齢階梯制の地域内人材育成システム (図 2) として表すことができる。それぞれの「自治活動」を通じて、集落の運営に必要な素養を身につけた人材を育成していることとなり、結果的に集落運営のリーダーたる資質や高い地域志向性をおのおのの構成員が指導しているのである。桜井徳太郎は、このような集落の人材育成機能を、地域社会共同体自身の手で行われる伝統的教育と表現し、「そのことごとくが、やがて共同体を担うのに必要な人間を養成するための成人教育であった」 [22] と指摘している。

このように、「自治活動」には、住民の手でその地域を運営する人材を育てる学習の側面があることが明らかとなった。住民個人のレベルでは、「自治活動」における作業や対話を通じて、集落というものを理解し、人々の関係性や共同性を理解し、その土地で生きていくことの意味を理解する。そうして培われたお互いの顔が見える関係性の中から、集落内の信頼が生み出されている。地域に必要な人材を自分たちの活動の中で教育し、生み出す仕組みは、その関係性の中に埋め込まれている。地域を運営する人材は、地域の中での信頼を得なければならない。従って、それは年度ごとの持ち回りの当番が任にあたるような誰でも良いものではなく、代替性が低い。地

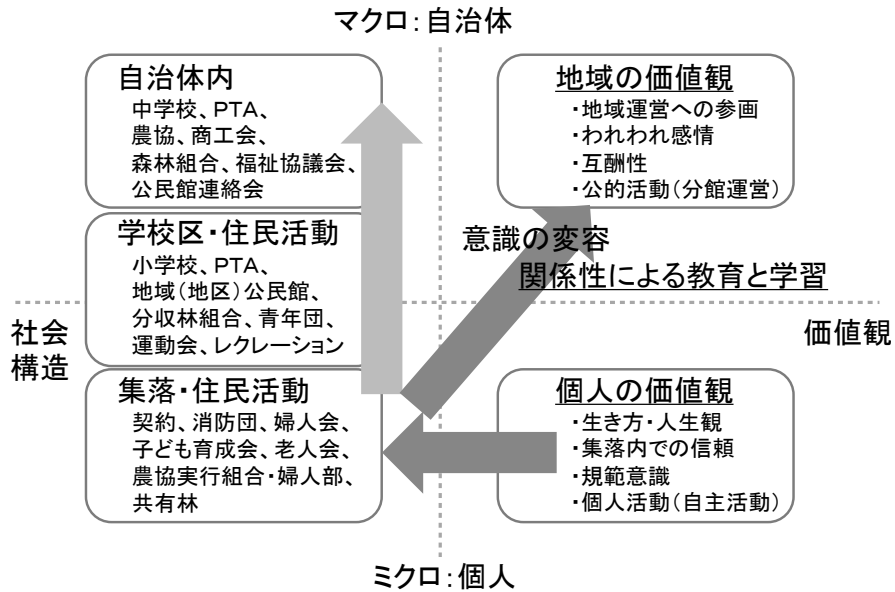
域を運営する役割を担える人材は、「自治活動」を通じて住民間の相互承認が行われた結果、衆目が一致する人材であり、住民一人一人が係わる地域活動の中で育て上げた人材である。その相互承認の場面も、「自治活動」の中に埋め込まれている。すなわち、鶴見の内発的発展論で示された、地域の内発性、社会の内発性を元に、その中で個体としての自分の発展をいかに位置づけていくかという意識変容の学習は、このような地域の「自治活動」を通じて行われる「地域社会共同体による伝統的教育」の中に存在しているのである。

## 2 節 社会関係資本の形成・ コモンズの視点から

一日に数本しかバスが走らない山間部での公共交通機関の不便を、近所の顔見知りに乗せてくれるという「知り合いとの人間関係」が補っていることがある。このように、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴が「社会関係資本」と言われる [23]。金山町の集落では、「自治活動」を通じた「社会関係資本」の形成が見られる。これは、表 1 で整理した「自治活動」の「型」のうちでも「意識構造の型」、「社会関係の型」、「感情・感覚・情動の型」との関係が深く、これらの活動での身体レベルの触れ合い、年長者からの継承等を経て、住民間の関係性が深まり、相互扶助や協働の念が生まれることによって形成されるのである。

稲葉陽二の「社会関係資本の定義」 [24] を基に整理すると、図 3 のように、金山町における「自治活動」と住民の意識変容の過程を整理することができる。住民個人の価値観 (第 4 象限) が地域の価値観 (第 1 象限) に移行する際、「自治活動」における集落住民による人材育成教育 (第 3 象限) が介在することによって、「個人の価値観」は「地域の価値観」へと変容 (第 4 → 3 → 1 象限) する。また、地域社会の構造から見れば、集落レベルの小規模地域コミュニティ (第 3 象限下) から、小学校区のような中規模地域コミュニティ、自治体のような大規模地域コミュニティ (第 2 象限) へと連続する多様で階層性を持った活動・集団へ活動の場を広げていく上で、最終的には金山町という自治体における地域の価値観の獲得へと結びついている。そこには、第 1 象限の「地域に対する価値観」の生成が大きく関係する。地域に住む人間は、その濃淡はあれども、必ず「地域」との関係性を持って暮らしている。それ以外のコミュニティは、自ら選択して関わっていくものだが、地域コミュニティだけは、生

図3 金山町における「自治活動」を通じた住民の意識変容  
 —社会関係資本の概念に基づく整理—



きていく以上、無関係で存在することはできない。集落という地域コミュニティは、住民にとって日常生活空間であると同時に、最も身近な社会とのつながりの場でもある。そこでの自己承認から、集落：小規模地域コミュニティ（第3象限下）、小学校区：中規模地域コミュニティ、自治体：大規模地域コミュニティ（第2象限上）へ、より大きな枠組みでの活動・承認の過程を経て、自らの「地域に対する価値観」自体も、より上位へと深化する。多くの住民の意識変容の過程はこのような推移をたどり、高い地域意識が住民の意識の中で共有されている。

金山町では大山林所有者の一族が「だんな衆」と呼ばれ、先々代の町長まで、同じ一族から輩出してきた。一見すると一族による町政の占有に見えるが、「だんな衆はみんな慈善事業に極めて熱心だった」[25]と言われるように、財力が高度な教育を受ける機会を生み、結果的に町の舵取り役を任されてきたと見る方が自然である。「だんな衆」の先祖達は、明治時代に国有林が不要存地林として払い下げられると買い求め、天竜川の治水事業で名高い金原明善の教えを請いに行ったという。「山林所有者は、林業を社会事業ととらえる金原の哲学を金山で実践すべく、世の中が不景気になればなるほど資本を山に投じ、明治後期、十年間で千町歩の植林を行った」[26]というように、「だんな衆」による政治は、町民からの信頼に基づくものだったと考えられる。このように考えれば、町村合併を一度も行っていない金山町の住民には一体感が存在する。これは、中学校が一校しかなく、住民のほとんどが同じ中学校の卒業生であるという形式的一体感だけではなく、「金山町は町民みんなのもの」という共有意識が存在しているのではないかと考えられる。

「みんなのもの」という共有の概念は、コモンズの考え方との重なりが見られる。コモンズとは、山林における入会権のように、共有の資源を管理・利用していくために一定の制限の下での共有資源であり、その資源を巡る人と人の関係でもある。このような視点から、奥田らは、金山町の特徴である「美しい街並み景観」について、景観づくりのためのネットワーク（金山町民、金山大工、設計事務所、製材所、森林組合、森林所有者、町役場による）が存在し、「美しい街並み景観」の利用について集団内である規律が決められ、利用にあたっての種々の明示的な暗黙の権利・義務関係が成り立っているとして、「タイトなローカル・コモンズ」と位置づけた[27]。金山町をコモンズと見るにあたっては、そのような狭義の捉え方では相応しくないように思われる。それは、「規範の強さや内容だけではなく、「みんなのもの」であることを可能にする社会的なしくみ、すなわち人間の行為の範囲や方向をかたちづくり社会的な力」[28]をコモンズとする立場に立てば、「みんなのもの」として利用され続けてきたゆえに、大きな改変や開発の手から守られてきたと考えられるからである。村落には、むらの空間は、「みんなのもの」という<地>の上に、あらゆる濃淡を持った<図>として「私」有の意味が塗られており、私有地は、利用に際して特定の者の自由が保障される度合いでしかないという所有意識が見られ、「むらの土地はむら全体のもの」という感覚があり、このような所有の在り方は「総有」と呼ばれている[29]。金山町は、基層部にあるそれぞれの集落が旧来からの結束を維持しており、このような「むらの土地はむら全体のもの」という意識が根底にあると考えられる。その延長上で、1925年の町制施行

以来これまで一度も合併を経験していないため、金山町全体も旧来からの「町」としてのまとまりを有しており、「金山町は町民みんなのもの」という意識が存在していると考えられるのである。

また、「人びとの集合の意識が形成されるプロセスをつうじて生成されてくるもの」をコモンズと捉える考え方もある。生活の中で住民各自の内面に蓄積された、身体性に基づく経験という私的あるいは個的なものを「住民の総意」に結びつけるものがコモンズであるという [30]。このような考えに立てば、金山町の住民の学習は、町の基盤であり、最も身近な社会との接点である集落を場とし、その「自治活動」での学習を経て金山町というコモンズを共有するための規範意識を獲得してきたと見ることができる。そして、そこでの先達の住民による次世代の住民への地域社会教育は、「みんなのもの」である金山町というコモンズを共有する一員としての承認できる思考と行動特性を養う学習の過程と見られることである。

### 3 章 キー・パースンの形成と地域

#### 1 節 内発的發展論における自己の創出

鶴見は、曼荼羅と萃点という考え方をういて社会変動を表現しようとした。曼荼羅とは、元々、真言宗の世界観を示したものであり、宇宙の中心である大日如来を中心に置き、他の諸仏、諸菩薩を、大日如来との関係で配置した図である。この曼荼羅を南方熊楠が科学方法論のモデルとして用いたことについて、鶴見は、「南方は曼荼羅の中心という概念を交差、すなわち最も多くの因果系列が会うところと解釈しなしている」 [31] と評価している。南方によれば、因縁の因は因果律を表し、縁は様々

の因果系列の鎖が偶然に出会うことを表すという。この因と縁の関係を表したものが図 4 である。一つの原因から結果が生まれる過程 (図 4 右) が「因」である。このとき、別の原因から結果が生まれる過程と出くわすことで、元々の結果とは異なる結果を生み出す (図 4 左) ことがある。この偶然の接触が「縁」である。すべての事象は、因 (必然) だけではなく、縁 (偶然) との双方の交わりで成立しており、特定の問題について解明しようとする場合、その問題について最も多くの因果系列が交差しているところを見つけ出し、その問題と関連している出来事の鎖を一つずつ研究していくことが必要であるとした。このように、様々の因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する点が「萃点」である。鶴見は、南方のこの考え方を支持し、自然現象や社会現象を捉える際に、「萃点」を用いて、そこから必然 (因) と偶然 (縁) の双方を科学的分析の対象とすることを唱えたのである。

また、鶴見は、曼荼羅を創造の理論として用いることも試みている。インドに仏教が生まれた当時、それ以前からの様々な土着宗教の神々がインドに存在していた。真言密教の曼荼羅は、それらを排斥することなく、大日如来を中心に置き、土着の神々を諸仏、諸菩薩とともに周囲に配置したものである。鶴見は、近代化論が描く未来像が収斂概念であるのに対し、南方の曼荼羅 (図 5) の中心である萃点はすべてのものの出会いの場であり、到達点ではなく通過点であるとした。その萃点も固定されたものではなく、常に流動しており、移動するものである。真言曼荼羅では大日如来を萃点として、諸仏、諸菩薩を配置したが、その仏や土着の神を萃点とすれば、また別な曼荼羅をつくることのできることを「萃点の移動」と表現し、この萃点の移動によって、何事をも排除せず、配置を換えることによって、それぞれの個に全体の中にある意味が与えられ、社会変動がもたらされるとしたのである [32]。萃点の移動で何事をも排除せ

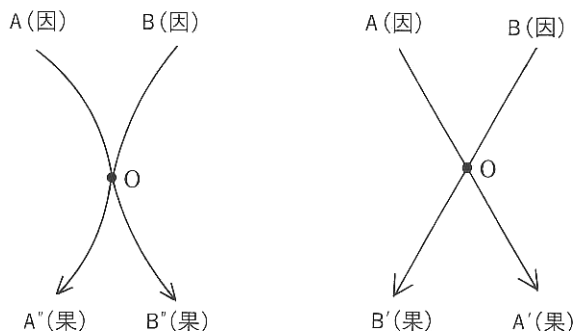


図 4 因 (必然) 縁 (偶然) の関係

出典：鶴見和子『南方曼荼羅論』(1992 P.94)

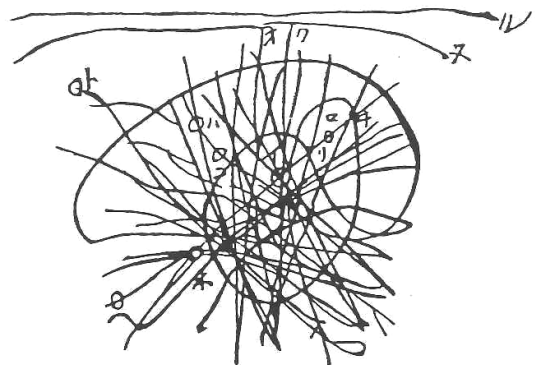


図 5 「南方曼荼羅」

出典：1903 年 7 月 18 日付土宜法竜宛書簡  
鶴見和子『南方曼荼羅論』(1992 P.36)



ず内部に取り込むことを可能となり、「いままで結びつかないと思われていたものが結びつくことによって、新しいもの、価値、思想が生まれる」ことから創造が生まれるとした[33]。このように、萃点は物事の「中心ではなく、集まることによって、すべてのものの関係性をつくりあげていく」[34]働きなのである。

宮原誠一は、「教育の本質」(35)において、人間は誰でも生まれ落ちて以来の社会的生活によって形作られてきたとし、その社会的生活による人間の形成課程に、社会的環境、自然的環境、個人の生得的性質、教育の四つの力が働いているとした。このうち前の三つを自然生長的な力とし、その人間の形成の過程を、望ましい方向に向かわせる目的を持って行う教育と区別した。教育の過程は形成の過程と平行に進行するのではなく、人間の形成の過程に内包される一要因であり、人間の社会的形成の過程に影響を及ぼすことに過ぎない。このため、形成が基礎的な過程であり、教育が形成に取って代わることはできない。そして、人間は社会的生活の全過程によって形成されるものであり、人間の形成や教育にとって第一義的な問題は、人間がどのような社会的生活を営んでいるかということだと指摘した。また、個人の生得的性質である素質は、それ自身としてはなんら積極的な活動を営むことはできず、環境の媒介を待って初めて活動を開始することができるため、形成の第一義的な規定者は環境である。個人の生得的性質は、生まれ落ちた時代のある社会集団という社会的環境の諸条件によって、発現の速さ、強弱、方向などが規定され、社会的環境と社会的文脈によって価値が与えられる指摘している。では、自然的環境は、人間の形成にどのように関係するのだろうか。宮原は、自然的環境は社会的環境の媒介をくぐることなしには、人間にとっての環境としての意味を持ち得ないため、社会的環境に従属する規定者であるとした上で、「私は人間の形成の要因として自然的環境の力を特立する」と述べている。それは、人間の生活はすべて一定の空間とそこに含まれる自然とに結びついており、「自然的環境は、人間の存立の一般的な基礎であり、風土は人間の形成にたいして重要な影響をもつ」という自明のことを正当に評価したいからだという。つまり、宮原のいう人間の形成は、自然的環境が風土となり、その土地に生きる人々の文化や社会集団としての価値観が生み出される。そうして生み出された社会的生活の中で、個人の生得的な性質が発現し、その社会的環境と社会的文脈によって、人間が形成されると整理できる。ここでいう生得的性質の発現は、鶴見のいう自己創出とほとんど同意と考えられる。従って、自然生態系に根差した小さき

地域の共同体という社会的生活の中での自己創出の過程が「形成」なのであり、「地域が人を育てる」ということを端的に表現していると言えよう。

## 2節 「萃点」から見た キー・パースンの形成

このように捉えると、金山町のような中山間地域の集落において繰り広げられてきた「自治活動」が、人間の形成に大きな作用を及ぼしてきたことが理解できる。第一に、自然村に由来する集落は、自然生態系に依拠した同一の風土を持つまとまりであり、宮原のいう社会的環境を同一にする社会集団である。従って、集落や地域共同体は、住民の人間形成を規定する力を根源的に持っている。第二に、集落の中心的建造物である自治公民館で行われる多様な「自治活動」によって、地域で生きる技術の伝授、共同体の価値観や協働の精神の涵養、伝統や地域文化の継承等が行われ、身体的な触れ合いと相互承認の過程を経て、地域の運営に必要な人材を自らの手で育てる地域社会教育システムとして機能している。そのような地域における教育の結果、第三に集落を基盤とした住民集団の中に、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会関係資本が形成されている。社会関係資本に位置づけられる住民の関係性や地域意識の共有は、第四に、コモンズとしての集落・学区・自治体を「みんなのもの」と捉える「総有」に近い状況を生み出す。明確な規定がなくとも、「みんなのもの」を大切にす規範意識へとつながり、住民一人一人が、それぞれの能力に応じて、「みんなもの」である金山町に貢献する。第五に、このような地域における人間の形成の過程は、目的的な活動ではなく日常的な「自治活動」の中で行われる「インシデンタル（偶発的）な学習」に類するものである。これは、教育や学習を目的とした活動ではないが、問題解決に向けた行動の結果として起きる学習であり、一般的に「行動志向性」の高さが示されている[36]。

それでは、地域での自己実現を思い描き、創造的苦痛を我が身に引き受けるほどの強い地域志向を持つキー・パースンはどのようにして生み出されるのだろうか。地域の同一の社会的環境下で形成された個人がすべてキー・パースンとして行動できるわけではない。ここで鶴見の曼荼羅を用いてみると、地域を曼荼羅として捉える場合、萃点になり得る人物が、キー・パースンなのである。地域には、風土に基づいて住民が暮らす一定の空間があり、集落の住民が生活の中で蓄積してきた時間と空間の歴史がある。自然生態系に根差した風土があり、人々が住み、

生産と生活を共にする共同体が機能し、伝統が受け継がれて文化を成し、それらが唯一無二の地域特性となって存在する。キー・パーソンはそれら一つ一つを、地域社会の所与の条件とした社会的環境下に生まれる。さらに地域共同体における家の格式、保有する財力、生業等の家庭環境も所与の条件として加わる。それらの必然と偶然を、自らの存在を萃点と位置づけることで曼荼羅に配置することは、それらの所与の条件を排除しないということであり、自らの人生として受け入れ、内発性発出の起点に位置づけるということである。そうしなければ、それまで価値のないと思われていたものを結びつけ、そこから新しい価値を創造できる人物たり得ない。その視点を有する偶然に出会えた人物のみがキー・パーソンたり得るのではないだろうか。キー・パーソンを萃点として見た場合、数々の所与の条件は、曼荼羅に配置されるであろう。従って、自らを萃点として、地域共同体に生きることを受容し、所与の条件を曼荼羅として配置し、相互に結びつける能力は、社会的環境下で形成されるものなのである。

鶴見は、頼富本宏との「対話まんだら」で、「複数の異なる系、または個人が集まる場である萃点は、変化をもたらすきっかけ（力）となる」と言及し、「一つの地域にさまざまな個人が集まる場があって、そこで交流し合い、話し合い、討論し合うことによって、個人の考え方や行動に変化がおこる。そうした個人がさらに大きな交流の場で、討論を重ね、初期の変化を深め、たしかめる。そして中心部（最も多くの系、または個人の集まる場）に集まって交流し討論した時に、その地域または社会全体の構造に変化をもたらす可能性が出てくると考えることはできないか。小地域の萃点から大地域の萃点へ向かう、積み上げ方式の社会変動の可能性である。このことを、具体的な事例をあげて、ためしてみたい」[37]と記している。本稿では、この鶴見の仮説に基づいて考察を行った結果、地域の社会的環境が萃点としてのキー・パーソンを形成するとも言える実態を見出し、鶴見の仮説を実証することができたと考えている。キー・パーソンたり得る人物であっても、共同体を受け入れ、その地域に生きることの選択は、必ずしも個人の自発的意志に基づいて行われるのではなく、地域による個人の束縛となる場面もあり、その場合は、個人にとっての抑圧となることもある。しかし、生まれ育った地域の内発性、社会の内発性、それらが全部、個人の内発性として蓄積されて、「抑えても抑えても私の個体から出てくるものが内発性」[38]であるならば、地域共同体の中に身を置き、地域による個人の束縛や抑圧の中から創造を生み出すキー・パーソン

は、地域において自分が背負う曼荼羅が複雑なればこそ、強い内発的発展の志向を持ち得たと考えられる。よって、キー・パーソンにとっての内発的発展とは、個人が秘めた内発性の発現であると同時に、自らを萃点とした地域の生得的資質すなわち地域のポテンシャルの発現過程なのであり、それらは不可分の関係にあるのである。このようなキー・パーソンが住民の信頼と期待を得て、また自身の宿命として、「創造的苦痛」を我が身に引き受けつつも、「みんなのもの」であるコモンズとしての地域をより良き方向に導くことは、自明のことであると言えるのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、鶴見の内発的発展論を軸として、「地域が人を育てる」ということの実態の解明を行ってきた。キー・パーソンの形成には、住民の手による地域社会教育の仕組みがあり、共同体内の社会関係資本が形成され、地域を「みんなのもの」とするコモンズ概念が共有されていることによって成立する「インシデンタルな学習」が存在する社会的環境が大きく作用する。この結果、キー・パーソン個人の生命としての内発性が、地域の内発性と相互にリンクして、地域の創造へと向かうことが明らかとなった。しかし、キー・パーソンは一人ではない。地域を広げて俯瞰してみれば、中心となるキー・パーソンを萃点として、複数のキー・パーソン達を曼荼羅に配置することもできよう。そのようなキー・パーソン達が、どのような関係性を持って曼荼羅を構成し、どのように地域創造の意識を形成していったか。その解明には、農村における青年達の学習運動や地域づくり実践者のライフヒストリー調査等の研究が必要である。また、キー・パーソンが先達のキー・パーソンの実践に倣うという実態もあろう。時間を越えたキー・パーソンたちの関係性の解明には、村落共同体が根源的に有する村落振興精神の涵養の仕組みの実態解明も交えながら検証することが必要となろう。この点については、今後の研究で、引き続き検討を重ねていくこととしたい。

## <引用・参考文献>

- [1] 総務省「コミュニティ研究会中間とりまとめ」、2007年、p.7
- [2] 内閣府「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と

- 市民活動の好循環を求めて」、2003年、p.15
- [3] 鶴見和子「内発的発展論の系譜」『内発的発展論の展開』筑摩書房、2003年、p.30
- [4] 同、p.23
- [5] 清成忠男「内発的地域開発を考える -1」日本地域開発センター『地域開発』7月号、1978年、p.1-6
- [6] 宮本憲一「内発的発展と住民自治」『環境経済学』岩波書店、1997年、p.294-296
- [7] 同、p.296-303
- [8] 保母武彦『「内発的発展論と日本の農山村」』岩波書店、1998年、p.133-134
- [9] 同、p.259-266
- [10] 鶴見前掲書、p.9-10
- [11] 川勝平太・鶴見和子『「内発的発展」とは何かー新しい学問に向けて』藤原書店、2008年、p.166
- [12] 中村佳子・鶴見和子『四十億年の私の「生命」ー生命誌と内発的発展論』藤原書店、2013年、p.34
- [13] 中村佳子『生命誌の世界』日本放送出版協会、2004年、p.26-27
- [14] 中村・鶴見前掲書、p.130-131
- [15] 同、p.59-60
- [16] 同、p.133-135
- [17] 佐佐木幸綱・鶴見和子『「われ」の発見』藤原書店、2002年、p.180-182
- [18] 多田富雄・鶴見和子『邂逅』藤原書店、2003年、p.41-42
- [19] 2014年1月24日実施の飯田市公民館副館長木下巨一氏の聞き取りによる。
- [20] 2014年1月30日実施の元宮原地区自治公民館長松元茂氏の聞き取り及び31日実施の元西中坪地区自治公民館長押川勝氏の聞き取りによる。
- [21] 鶴見和子「最終講義 内発的発展の三つの事例」『鶴見和子曼荼羅Ⅸ環の巻ー内発的発展論によるパラダイム転換』藤原書店、1999年、p.32-33
- [22] 桜井徳太郎「結集の原点」鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険ー社会と変化の新しいパラダイムー』筑摩書房、1975年、p.202
- [23] 内閣府「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、2003年、p.15
- [24] 稲場陽二「社会関係資本とはなにか」文部科学省生涯学習局編集協力『生涯学習政策研究 生涯学習をとらえなおす ソーシャル・キャピタルの視点から』悠光堂、2012年、p.8
- [25] 森巖夫『小さな町の大きな試みー情報公開と杉の金山町』清文社、1985年、p.130
- [26] 「特集癒やしの里金山」『EPTA』50号、2011年、p.14-16
- [27] 奥田裕規・井上真「日本の山村の内発的発展とコモンズ」応用森林学会『森林応用研究』第22巻2号、2013年、p.9-10
- [28] 藤村美穂「「みんなのもの」とは何かーむらの土地と人」井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学ー森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社、2004年、p.33-34
- [29] 同、p.40-41
- [30] 家中茂「石垣島白保のイノソー新石垣空港建設計画をめぐって」井上真・宮内泰介編前掲書、p.135-136
- [31] 鶴見和子「南方曼荼羅ー未来のパラダイム転換に向けて」『南方熊楠・萃点の思想ー未来のパラダイム転換に向けて』藤原書店、2009年、p.126-127
- [32] 中村・鶴見前掲書、p.160
- [33] 同、p.167
- [34] 川勝・鶴見前掲書、p.198
- [35] 宮原誠一「教育の本質」『宮原誠一教育論集第一巻』国土社、1976年、p.7-25
- [36] 甲斐田万智子・中山実生「権利と行動の主体としての子ども」江原裕美編『内発的発展と教育ー人間主体の社会変革とNGOの地平』新評論、2003年、p.300-301
- [37] 頼富本宏・鶴見和子『曼荼羅の思想』藤原書店、2005年、p.195-196
- [38] 佐佐木・鶴見前掲書、p.180-181